

気になる彼女（あいつ）



そこは禁止

kajioboy

「中嶋さん、これから時間ありますか？」

芸能人材派遣会社の社長、館林信子は、タレントのプロフィールを引き出しに入れながら言った。

「あ、ありますよ。飲みに行くんですか？」

「いいえ、そうじゃないんですが、パソコン得意ですよ〜！」

「ええ、まあ、本職ですから・・・」

「家のパソコンが、ちょっとおかしくなって、見てもらえますか？」

「パソコン？ いいですよ。明日ですか？」

「これから、家へ寄って貰えますか？」

「え〜これから？」

「時間ありますか？」

時計を見るともうすぐ8時になろうとしていた。

（まあ、時間はあるが、これからってもう夜の8時だぞ〜）

「ええ、こんな時間で良ければ・・・お邪魔できますか？」

「大丈夫よ。私、一人だから、何時でもいいわよ」

そういえば、館林信子は独身だった。

年齢も確か36歳か37歳だったと記憶している。

3年前に芸能プロ専属の派遣会社を立ち上げて、みるみる内に業績を伸ばし、今では所属タレント300人位が在籍してるという。

取引先の紹介で昨年から取引開始し。タレントのブログを請負ったのだ。

今回は韓国への進出をめぐり、その打合せだった。

体育会系の館林は、そのスリムなボディと豊艶で色ッぽい容姿でどんな営業をしているのかは、考えないようにしている。

身長は拓海と同じくらいで足が長い事は、ある意味、武器になるという事だ。

10分ほどバイクを押しながら、世間話をしながら歩いた。

「ここよ・・・」

着いた所は、会社とそう遠くない四谷3丁目の奥まった住宅街だった。

7階建てのマンションの1階半分は駐車場になっている。

「私の車は、駐車場にあるから、その前に停めて大丈夫だからね」

「ああ、解った。置いてくるよ」

「部屋は107号室。一番奥の部屋です」

と言いながら、ツカツカと玄関へ入って行った館林。

（何だ。待っててくれてもいいのに・・・）

拓海はアルファロメオの前に横付けに停めた。

いつもの如く、キーロックは欠かさなかった。

部屋の中に入ると、摩訶不思議な香りが漂っていた。

確か、アロマなんかという香を焚いているようだ。
女性の部屋らしく、整理整頓、清潔な感じがする。

パソコンがおかしいって？ 本当かな～と
半信半疑で筐体を開けてみた。

見たところ、何の変哲も無い、至って正常な状態に見えた。

「解ります～？」

と、肩口から顔を出す館林。その髪が拓海の頬に触れる。
ほのかな女の臭いが漂う。

「ああ、大丈夫ですよ。接触不良か触ってみますね・・・」
内部のコネクタをチェックしていると、一箇所外れていた。
ハードディスクのケーブルだった。

「これで、大丈夫ですよ」

筐体のケースを元に戻し、電源を入れた。

「わ～あ。本当だ。直った～」と手を叩いて喜ぶ館林。

「ケーブルが外れてましたね。もう、大丈夫ですよ」

「さすが、中嶋さん。プロですね～」

(プロなんだけど・・・)

「お酒、飲みます？」

「いや～飲んだらバイクに乗って帰れなくなるから・・・」

「何なら、停まっていてもいいですよ。部屋はありますから・・・」

「え？ そんな事、出来ませんよ。ははっ」

一瞬、ドキッとした。

いくら拓海でも、独身の女性の家には泊まれない。

ちらりと彼女（尚子）の顔がよぎる。

（何、考えてるんだ、この人は？）

館林は、ウイスキーをロックで飲み始めた。

拓海には、濃いめのアイスコーヒを飲んでいた。

来月の中旬に韓国行き話を始めた。

「知り合いの李さんに、頼んだから、KBSの関係者と合えると思うよ」

「ええ～？ あのKBSですか？ すご～い」

「そう？ そんなにすごいの、KBSって？」

「あら、知らないんですか？ 韓国のNHKみたいなものですよ～」

「そう？ それはすご。俺、韓国について何にも知らないからな～」

「もし、上手く行けばCMなんか取れるかも～」

と、グラスを揺らしながら喜んでいる館林。

「韓国って言ったら、垢すりマッサージとキムチしか知らない」

「私、マッサージしようっと。中嶋さんもどう？」

「俺？俺はいいよ。キムチ食べて肉喰って、それでいいよ」

「え～え、勿体無い。折角、韓国へ行くのにい～」

と、年甲斐も無く浮かれ始めた館林。

「ちょっと、待ってね～」と、立ち上がって、席を外した。

（どうしようかなあ～俺も酒飲もうかなあ。バイクを此処停めておけば・・・）

拓海は、邪な考えを持ち始めた。

（いやいや、駄目だ。バイクで帰ろう。呑まないでいよう）

タバコを啜えて、火を点け様としていたら、館林が戻ってきた。

「お待ちどう～ はい、キムチあったわ」

拓海の前にドカッと胡坐をかいて座った館林。

その格好を見て、ポロリと口からタバコが落ちた。

さっきまでのスーツ姿から、一気に変身しTシャツとショートパンツ姿だった。

それも、Tシャツの下はブラを付けていない様で、突起がはっきり見える。

ショートパンツもランニング用のパンツで、足の隙間から下着が丸見えだ。

「え、え、館林さん・・・いつもその格好なんだ？」

「そう、家ではいつもこの姿ですよ。驚いた？」

「ま、まあ、驚かないほうが不思議じゃないかな～」

いつも吊り上った眉毛が、今は垂れ下がり、濃い化粧も今はスッピン。

これが、本来の姿なのだろう。

ラフな格好になった館林は、陽気に良く笑った。

唯の女性に戻ったかのように思えた。

気がついたら、いつの間にか10時を廻っていた。

いつもならまだ早い時間なのだが、一人で素面ってのは面白くない。

帰ろうとして、立ち上がろうとしたときだった。

一人ウイスキーを飲んで酔っ払ってうな垂れていた館林が急に起き上がった。

「そうだ。中嶋さん、こっち来て～」

ふらつきながら、拓海の手を引いて奥の部屋へ入った。

「あ、何？ なんですか？」

と言う間もなく、部屋の電気をつけると、そこには白いベッドが横たわっていた。

そして、手を広げ大の字の格好でベッドに飛び込んだ。

そこは、館林の寝室だった。

「ここって、寝室でしょう？ まずいですよ～」

拓海は、慌てて部屋を出ようとした。

「お願い。ねえ、お願い」と館林が叫んだ。

「え？」

「ちょっとだけ、ちょっとだけでいいからお願いがあるの・・・」

「お願い？ 何ですか？」

館林は、ベッドに座り直すと、肩にブラケットをかけた。

「私、お酒飲むと、肩が凝ってしょうがないの。少しだけ、揉んで・・・」

「え～え？ 揉む？」

（おいおい、何言ってんだよ～ 俺は男だぞ～）

素面の拓海に、大胆な行動をとる館林は普段とは別人に見えた。

「お願い、五分でいいから・・・ね、お願い！」

会社の取引先の人と、まして女社長と2人きりで、更にその部屋で・・・

普段なら有り得ないシチュエーションだ。

どっかの三流映画かVシネマみたいな場面だ。

しかし、無下に断るわけにもいかない。何しろお客さんだから。

仕方なく、覚悟を決めた拓海。

「じゃ、ちょっとだけです。もうすぐ、帰りますから・・・」

「ありがとう。ごめんなさいねえ」

館林はベッドにうつ伏せになった。

長い足がスラリと伸び、ショートパンツが半分だけ捲りあがっていた。

白い臀部が目に入る。

（見てませんよ、なんて言えないな～）

小悪魔に見えてきた館林のクビを、吸血鬼の真似をしておもいきり掴んだ。

(あ・・・) 固い手触りだ。

「凝っているでしょう？」

確かに凝っている。異様にクビの周りの筋肉が硬直している。

「かなり、凝ってますね、ちょっと力をいれますよ」

「はい、お願いね～」

なんとも艶かしい声だ。

拓海は、館林の首を絞めるように、肩の筋肉を掴むように、指先に力を入れた。

「あ～あ、う～ん。気持ちい～」

な、なんと言う声だ。

「背中もお願い～」

半分、妬けになっていた。

(こうなったら、どこでも揉んでやる)

とは、思ったものの30代の女性の体をこうも簡単に触れる事ができるとは・・・

拓海にも黒い尻尾が生えてきそうだった。

「しかし、どうすればこんなに硬い体になるんですかね？」

「う～ん。どうしてかしらね～」

なんとも気持ち良さそうな声を出す館林。

(尚子にだってマッサージした事ないのに、俺は何やってんだ?)

そう思っていると、館林が起き上がろうとした。

もう、終わりかとホッとしたが、そうではなかった。

館林は仰向けになって目を閉じてしまった。

「ごめんなさい。前も、お願い・・・」

「え！？ ま、前も・・・？」

薄っぺらなTシャツ一枚で、殆ど裸状態にどうしろと言うのだ？

さすがに、拓海もこれ以上は手が出せないと思った。

汗で乳首がはっきりと浮き出ている。

(もう、だめだあ。これ以上は・・・)

と、じっとその2つの突起物を眺めていた時だった。

「館林さん、館林さ～ん」

玄関で戸を叩く音がした。

拓海は、とっさにその手を離し、その場に正座した。

館林もベッドから飛び起きて、キョトンとした顔をしている。

「館林さん、館林さ～ん」

「あれ、管理人さんだ・・・」

「管理人？」

「中嶋さん、ちょっと待ってね」

と、ベッドから降りると、ガウンを羽織って玄関へ向かった。

とにかく、気持ちを冷静に、冷静に・・・

と、寝室からでて、リビングへ戻った。

アイスコーヒのグラスを持つと、ぐっと飲んで落ち着かせた。

氷が解けて、アイスコーヒは薄くなっていた。

館林はまだ玄関で話をしている。

まだ、胸がドキドキと音を立てて、誰かに聴かれそうだ。

少し、深呼吸した。

「中嶋さん、ちょっと来て～」

玄関から館林が呼んだ。

何事だろう？

立ち上がり、玄関に行くとそこに、管理人さんと警官がいた。

「え？ どうしたんですか？」

声を掛けると警官がすみませんと言いながら玄関に足を入れた。

「表にあるバイク、おたくの？」

「え、そうですが、表じゃなく駐車場の車の傍に置いてありますけど・・・」

警官はじっと拓海を睨んだ

「駐車場じゃなくて、表の道にあるの、おたくのじゃない？ 番号は1234。違う？」

「それ、俺のバイクですけど、表ってどういう事ですか？」

「どういう事って、表にあるじゃない。ちょっと、外へ出てくれますか？ 確認して・・・」

一体、あの警官は何言ってるのだろうと、不思議だった。

「何、言ってんだよ～」

「中嶋さん、外へ行ってみましょうよ。確認したほうがいいよ～」

館林の車の前に横付けしていたはずのバイクが消えていた。

「あれ～ 俺のバイクが無い！ 無いぞ～」

拓海は車の周りを探したが、バイクは見つからない。

「え～盗まれた～」

「君、君、これじゃないのか？」

と警官がマンションのエントランス前で拓海を呼んでいた。

「え～？」

急いでそこへ行くと、拓海のバイクがマンションの壁に横付けにされていた。

「あ～！ 俺のバイクだ。なんで、こんあ所にあるんだ～？」

拓海はキーロックしていたはずなのに、とハンドルを動かした。

確かにロックされている。

「誰かが、盗もうとしてたんだ。チクショウ！」

外装に傷が無いか確認するが、それといった外傷は無かった。

「本当は最初からここに置いてたんじゃないのかい？」

「違いますよ。俺が置いたのは、彼女の車の前に駐車したんですよ！」

警官は館林の方を向いて、尋ねた。

「その様子を確認してますか？」

クビを捻る館林。

「直接は見てませんが、彼が家に来た時は、そう言っていました・・・」

(おいおい、何言ってんだよ～ 最初からそうだと言えよ～)

「じゃ～、置いてあるのを見ていないんですね？　そうですね？」と念を押す警官。

「は、はい。でも、彼は真面目な人だからきっと置いたと思いますよ」

(何だよ、それ～)

「おまわりさん、本当ですよ。最初っから車の前に置いたんですよ」

と訴えているその横から管理人が顔を出してきた。

「でも、私が見たときは、最初から此処でしたがね。だから通報したんですよ～」

(なんだ、このバカ管理人。最初って何時の事だよ。ボケてんじゃないのか！)

うんうんと頷き、警官は自転車の所まで戻って行った。

「中嶋さん、大丈夫？」

「ああ、何ともないけど。誰かが盗もうとして此処まで持ってきたんだ、きっと」

「誰かって？」

「泥棒だろう。ここら辺、物騒だな～」

全く、不愉快であった。

先程の隠微な世界が、引き潮みたいにさ～っと、去っていった。

そこへまた警官がやってきた。

「君、中嶋さんだっけ！　ここにサインして・・・」

「え？サイン？」

警官は、青い駐車違反切符の綴りを拓海に差し出した。

ペンも添えて・・・